

南区の歴史と伝説

35期生

I テーマ設定の理由

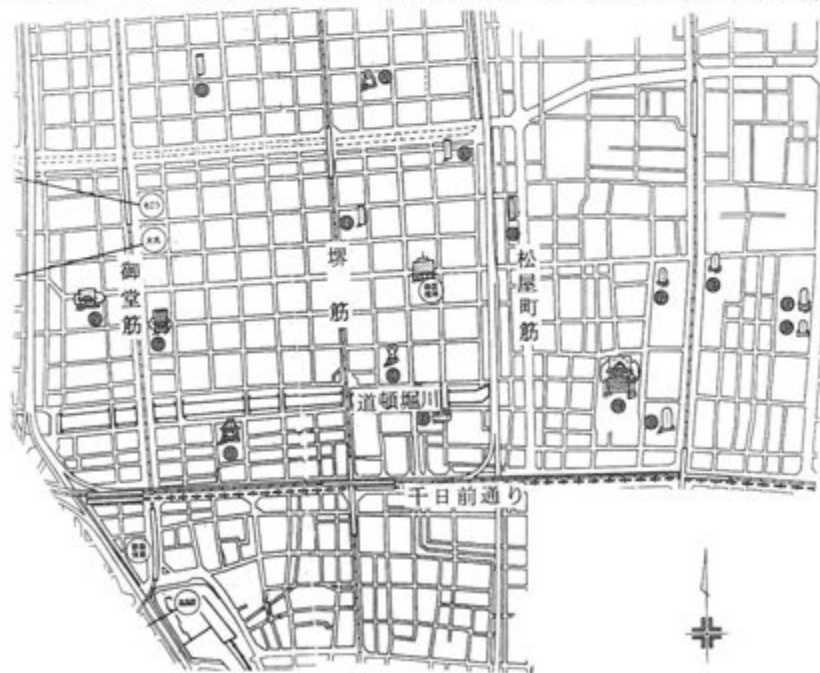
自分の生まれて育ったこの南区はにぎやかなだけで、歴史や伝統があるなどとは思ってもなかった。しかし、一枚のパンフレットからこの南区の歴史と伝統を知った。そのパンフレットからは商業の町「ミナミ」の成り立ちがわかった。しかし、そういうことだけでなく、町を歩くことによって南区を見直し、ふるさとの良さを味わうために研究を始めた。

II 研究方法

○次に挙げる16の史跡を対象にする。

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 橋本宗吉絲漢堂跡 (大阪市顕彰史跡) | 2. 油かけ地藏 |
| 3. 住友銅吹所跡 (大阪市顕彰史跡) | 4. 心学明誠舎跡 (大阪市顕彰史跡) |
| 5. 御津八幡宮 | 6. 三津寺 |
| 7. 法善寺 | 8. 聖観音立像 (重要文化財) |
| 9. ニッ井戸 | 10. 高津宮 |
| 11. 豊竹若太夫墓所 (大阪市顕彰史跡) | 12. 田中金峰墓所 (大阪市顕彰史跡) |
| 13. 近松門左衛門墓 (史跡) | 14. 井原西鶴墓 (大阪府史跡) |
| 15. 井原西鶴、中井一族墓所 (大阪市顕彰史跡) | 16. 大和郡吉遺難之地 |

○この史跡を一つ一つまわってみる。(写真をとり、気付いたことをメモする。)



III 研究結果

1. 橋本宗吉絲漢堂跡 (大阪市顕彰史跡)



この橋本宗吉は、大阪蘭学の祖といわれる。もとは貧乏だった。江戸に上ってオランダ語を修得し、大阪に帰ってからは、絲漢堂で、蘭学を教えた。蘭学とは、江戸時代にオランダ語から西洋の学術を研究しようとした学問。

宗吉は蘭学や電気学を学び、又、それを教え多くの英才を世に出した。そして最後まで勉強し続けたということは立派だと思う。

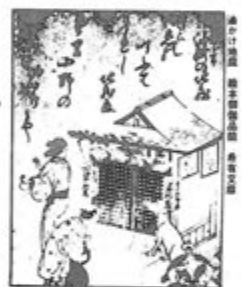


2. 油かけ地藏

狭い入りくんだ路地にある。

この地藏はちょっと変わっていて、赤の前かけや団子は供えておらず、参詣者が頭から油をかける。そこからこの名がついた。

日本書紀にも記されていた。大変古いものだとということがわかる。

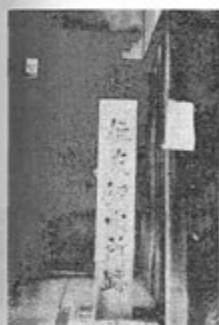


3. 住友銅吹所跡 (大阪市顕彰史跡)

古い家が軒を並べる静かな通りにある。江戸時代を通じて大阪は銅精錬業の中心であった。大きな理由としては、水運に便利なことである。

地図を見てもわかるように、東横堀、西横堀、長堀、道頓堀などの川がある。そして、これらの川沿いには数多くの銅吹所があった。

輸出向けの銅はすべて大阪で作られた。



4. 心学明誠舎跡 (大阪市顕彰史跡)



ここは、堺筋に面していてよく人目につくところだ。しかし、車がたくさん通り、ビルも建ち並んでいるところにあるので、あまり、歴史を湛える史跡だという気はしない。

心学とは江戸時代、儒学や国学と並ぶ有力な学派の一つだった。しかし、一つ違うところは、儒学や国学のように上流階級の人達だけのものではなく、一般の庶民に人気があり、心学ブームの波に乗って、この明誠舎は建てられ、講義所として使われた。

5. 御津八幡宮



人通りの多い御堂筋を折れたところにある。写真の左側に本堂がある。大きくて、新しい建物である。

正しくは御津宮と呼ばれる。社伝の絵巻物によれば、有名な奈良東大寺の大仏建立のとき、都へ移す神霊を、一時安置した跡を世人が崇拜し、これが御津八幡宮の起源となったとしている。

6. 三津寺



御堂筋を御津八幡宮と反対に曲がったところにある。御津八幡宮とは、目と鼻の先である。せまい道に、はっきりなしに車が通っている。

写真でもわかるように、御津八幡宮とは対称的に、古い建物である。大阪でも有名な寺である。

7. 法善寺



この寺は、16の史跡の中で一番大きく、たくさんの方が参詣に来る。

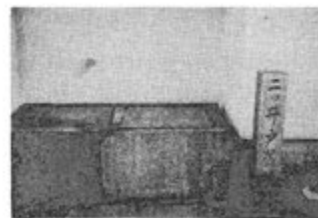
千日念仏回向を始めたので千日寺とも呼ばれる。この寺の南の墓所に通じる道の両側は、千日寺の前ということで千日前、千日前通りと呼ばれる。千日前通りとは、地下鉄にもあるように、有名な通りである。こういうところからも、地名ができるのかと、面白く思った。

8. 聖観音立像



地図からでもわかるように、道頓堀沿いにこの観音像が安置されている寺(法案寺)がある。眼の切れは力強く、口も引きしまっている。腰から下のやや細長い繊細な感じの特色から、平安時代末期の作品とされている。戦時中市立美術館に疎開していたため焼失をまぬがれた。

元旦から一週間に限って開扉される。



9. ニッ井戸

ニッ井戸は長方形の石の井桁の真中を石で仕切った形であった。1つは清水が無限に湧き出ている、住民の暮らしを潤していた。水に恵まれているために江戸時代、銅吹場も置かれていた。明治22年、交通のさまたげになるというので、埋められてしまった。



この井戸には、二つの説がある。

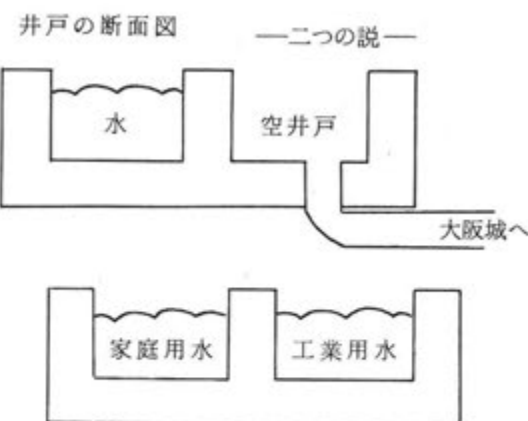
1. 一つの井戸は清水が無限に湧き出ている。もう片方の井戸は、空井戸になっていて、秘密の通路として、大阪城内に通じていた。

この場合、大阪城内とは、現在の城内ではなく、現在の東横堀川が外堀と考えての城内のことだ。

2. 一つの井戸は清水で家庭用水、飲料水として使われたが、もう一方の井戸は飲料水には適さず、銅を作るための工業用水として使用された。

という説だ。

現在、粟おこし屋「津の清」の前において、両方の井戸に水がなみなみとたたえられているが、もちろんそれは、湧き出ているのではなく、水を入れているのである。



10. 高津宮

ここは、公園があるなど、広々としたところで、毎年桜祭、夏祭など、季節の祭りが行われる。

祭神は仁徳天皇。もと大阪城のあたりにあったが、秀吉が大阪城を築くときに、現在地に移されたという。

11. 豊竹若太夫墓所 (大阪市顕彰史跡)



人形浄瑠璃の起こり出したころ、道頓堀には東に豊竹座、西に竹本座があって、愛好家の人気を二分していた。

この若太夫も、もとは竹本座の弟子だ。だが、23才のときに飛び出して、豊竹座を築いた。常に竹本座の一步先を行こうとし、舞台装置や人形の衣装などに工夫をこらした。晩年には豊竹座が2度にわたって全焼し不運な生涯を閉じた。

しかし、竹豊二座の対立が人形浄瑠璃を進歩させたのはまちがいない。

12. 田中金峰墓所 (大阪市顕彰史跡)

田中金峰はわずか19才で世を去った。江戸後期の漢学者である。しかし、「大阪繁盛詩」などの名著を残した天才的人物であった。

金峰は、牛の月・午の日・午の刻に生まれたことから、ふつうの子ではあるまいと評判された。金峰の理想は、江戸に留学して京都に門戸を張ることであったが、生まれつき病弱なためこれをあきらめた。





13. 近松門左衛門墓（史跡）

この墓は、ガンリンスタンドの横にあって、左の写真からもわかるように、非常に狭いところにある。去年、新しく作りかえられたばかりなので、きれいなものだった。

この近松門左衛門は、「東洋のシェイクスピア」とも呼ばれる江戸時代初期の浄瑠璃作家。作品には、義理、人情の葛藤とそれにまつわる人間的苦悩を描いたものが多い。「^{こくせんや}国姓爺合戦」などの時代物と「曾根崎心中」などの世話物があり、その数は150。世話物浄瑠璃には、悲劇の



中に人間性の発露を見出そうとした彼の創作態度がよく表れている。詩情豊かな作品として今もなお上演されている。

墓はもともと法妙寺の境内にあったが、寺が移転したため、仮住いをしているということは、残念なことである。

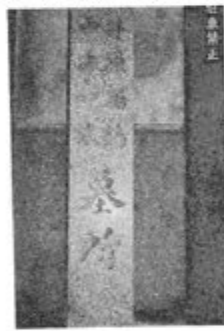


14. 井原西鶴墓（大阪府史跡）

15. 井原西鶴・中井一族墓所

（大阪市顕彰史跡）

井原西鶴とは、近松門左衛門 松尾芭蕉と並んで元禄文学を咲かせた人である。武家出の門左衛門とは違って西鶴がとりあげたのは、もっぱら町人の世界であった。この時代は、金が力といわれる町人社会の最盛期であった。彼はそうした金と欲が織りなす世相をリアルにそ



して露骨に描いた。明治以来の作家で西鶴の影響を受けなかった人は少ないといわれるが、その意味で近代小説の生みの親ともいえるであろう。

中井氏は代々儒学

を家の学問とした。大阪における私立学問所を150年にわたって経営し、文教の維持、発展に貢献した。

16. 大利鼎吉遭難之地

この史跡は人形の間屋の並ぶ大阪では有名な、松屋町筋に面したところにある。人通りも多いところだが、木の陰に隠れてわかりにくかった。

当時、下寺町の万福寺に新撰組浪士の屯所があり、毎日、うの目た



かの目で勤王の志士を探索していたのである。大利鼎吉はその犠牲者の1人で、これを、「ぜんざい屋騒動」という。

右のスタンプ集は南区が区民の人達に、我が町「ミナミ」の歴史と伝説を学びつつ体力の向上と、コミュニティづくりをはかるため、史跡ごとにスタンプを用意したものである。これは、南区ならではの、南区だけの史跡めぐりである。



IV 結論

南区は区画整理ができていて、方向音痴の私でも、すぐに16の史跡を見つけることができた。

この16の史跡をまとめて言えることは、町人文化に関係があるということだ。ほとんどの建物は江戸時代にできたものであるし、人物でも町人社会に活躍した人達ばかりである。ここからでも、現在の商業の町「ミナミ」の歩みがわかる。

V 総括

☆反省

私の調べたことはまだ輪郭にしか相当しない。輪郭はあっても、目、鼻、口はないのだ。輪郭だけではまだ一人前でないことはわかっているが、この数百年という時間の経過を語るには、夏休みという一ヶ月余りの期間は短かすぎた。人物、建物の表面的なことを本で調べるだけになってしまったことを反省したい。来年はもっと計画的に進めて、一時的な事柄だけでなく前後関係をつかんで、自分で満足、納得のできる研究に仕上げたいと思う。

☆感想

いろいろな史跡を廻ってみて、今まで私は南区のはでな一面しか見ていなかったことに気付いた。今日の「ミナミ」が成り立っているのは、この歴史があったからだ。しかし、ビルとビルの谷間、人ごみの中など見落してしまいそうなところに追いやられ、この史跡達は狭苦しい思いを、今、している。このように歴史を潰えた史跡達が、新しいものに押され、消されつつある。このままでもいいものか。もっと、区、市そして、国で管理し、長く保存してほしいと思う。

しかし、これ以上に気にかかったのが史跡への「いたずら」である。マジックでのいたずら書き。これは南区に限ったことでなく、大阪いや日本全体に当てはまることなのである。欧米では建物に傷をつけたり、ガムのボイ捨てはないそうだ。こういう公共物を大切にしないのは日本人の悪いくせである。この間新聞に次のようなことが書かれてあった。

「遺跡は先祖が私達に残してくれたものではなく、子孫からの預かり物である。」と。この預り物を傷つけないように子孫に返す——これはとても大切なことだと思う。